

追悼

岸本晴雄先生の略歴と業績について

池谷 壽夫

岸本晴雄先生が今年2月に「突然に」亡くなられた。元気そうな年賀状が来ていたので、よけいにそう思った。

私は、大学院生の時に、名古屋哲学研究会その他で、岸本さん（ここではそう呼ばせていただく、そう言わないと怒られそうな気がするからだ、「池谷君、そう堅苦しくなるなよ」と）のお世話になった。嶋田豊さんはいつも大言壮語し、弁舌さわやかに現代的な問題を語るカッコいいアジテーターであり、福田静夫さんはアカデミックな知識の蘊蓄を傾けて、いつも切り込み隊長よろしく戦闘的に問題を体系的に展開していく。これに対して、岸本さんはいつもその2人の間で、温厚な顔で終始ニコニコしながら語っていた。

私が1980年に高知大学に就職したために、その後はなかなか会うことができずにいたが、『科学と思想』や『哲学と現代』に掲載されたものを読んで、現代的な課題に取り組んでいるお姿に触れることができた。とくに業績番号15～17の認識論の現代的形態に関する論文は、私に「哲学するとはこういうことだ」と教えてくれたものであった。その文体といい、問題の立て方といい、本当に斬新であった。その後2002年に、何かしらのご縁があって、岸本さんの後任として、入れ替わりに日本福祉大学に来ることになった。

今あらためて岸本先生の業績を整理しまとめてみて、今更ながらに、岸本先生が地道にこつこつと現代的な課題に取り組んでこられたこと、このことに敬意を表さざるを得ない。いまだに日本の多くの哲学者が——私自身、自戒をこめてこう言うのだが——外国の哲学紹介に明け暮れ、現実の問題と格闘せずにいる状況を見るにつけ、そう思う。

この小論では、岸本先生の略歴と業績を紹介して、追悼の辞に代えさせていただく。

1. 岸本晴雄先生の業績について

岸本先生の仕事は大きく3つに分けることができる。

1つは、ヘーゲルを中心としたドイツ古典哲学の研究である。卒論のフォイエルバッハに始ま

り、修論のヘーゲル、翻訳の仕事、晩年のシラー研究に至るまで、岸本先生の思想の根はドイツ古典哲学にあった。

今回業績を調べる中で、岸本先生がフョイエルバッハを卒論で取り上げていたのは、驚きであった。なぜフョイエルバッハを取り上げたのであろうか。そしてまたなぜヘーゲル研究に進んだのであろうか。今となってはわからないが、嶋田豊氏もたしか1950年に民科哲学部会の機関誌に書いた最初の論文が、フョイエルバッハであった。名古屋哲学研究会に集う真下信一氏をはじめとする哲学者たちの人間主義的伝統が生きているのを垣間見た気がした。

第2の仕事は、認識論の現代的なあり方の探求である。先にも述べたように、私が斬新だと思ったのは、その語り口のやさしさで、現代社会における認識論の新たな課題を模索し、提起していたことであった。この仕事は、これも推測の域を出ないのだが、この頃から学生ときちんと対峙しながら思索を深める中で、ドイツ古典哲学のいわば「えせ哲学」的研究者から脱皮して、「生きた哲学者」「生活哲学者」へと大きく変わっていく転機となった仕事であるように思われる。

その後、岸本先生は、まさに生活哲学者として、現代における生活論に関する研究に突き進んでいく。これが第3の仕事である。いや、第3のというよりは、岸本先生の仕事全体はここに帰着したといってよいであろう（この点については、本誌所収の福田静夫氏の論文、参照）。

しかも、生活論といっても、「文化としての生活」の視点からそれに取り組んでいるのが、岸本先生の仕事の特徴であった。生活を労働との関係で狭くとらえるのではなく、遊びや美といった文化を核にして、労働をもそこに組み入れていく生活世界を構想しようとしたのであろう。

岸本先生は、古典哲学を研究するばあいでも、それを自己目的とはせず、つねに現代社会の問題と結びつけて研究してきた。そして生活の視点から、現代社会における人間の問題と課題をトータルにとらえようとしてきた。まさにこの点で、岸本先生は真下氏を中心とした名古屋哲学研究会の最良の継承者であったと言っていいであろう。私も、こうした岸本先生のヒューマニズムの生活哲学に対する思いを受け継ぎつつ、仕事をしていきたいと思う。岸本先生のご冥福をお祈りしたい。

2. 岸本晴雄先生の略歴

1936年7月28日 岡山県勝田郡新野村大字新野山形（現津山市）に生まれる

1955年3月 岡山県立福渡高等学校卒業

1955年4月 名古屋大学文学部入学

1960年3月 同文学部（哲学専攻）卒業

1960年4月 名古屋電気工業高等学校教員

1963年3月 同校退職

1963年4月 名古屋大学大学院文学研究科修士課程（哲学専攻）入学

- 1966年3月 同研究科修士課程修了
1966年4月 同研究科博士課程進学
1969年3月 同研究科博士課程単位取得修了
1969年4月 日本福祉大学講師
1976年4月 同大学助教授
1985年～1986年 ドイツ留学。Bochum大学・Otto Pöggeler教授のもとでヘーゲル研究に従事。
1986年4月 同大学教授
1988年4月～1989年3月 同大学社会科学研究所出向研究員
2002年3月31日 同大学退職
2002年4月1日 同大学名誉教授
2009年2月25日 多臓器不全のため愛知県小牧市の病院で死去（享年72歳）

3. 岸本晴雄先生の業績

【著書】

1. 『講座マルクス主義研究入門』青木書店, 1975年, 「実践」, pp. 129-166.
2. 『人間の自由を考える』学習の友社, 1984年10月.
3. 岸本晴雄・津田雅夫 『現代人間論への視座——文化・生活・意味』法律文化社, 1993年.
4. 加藤恒男編著 『意味のミラーボール——21世紀への序奏』青木書店, 1996年, 第3章「事件としての哲学——青年と老人をめぐって——」, pp. 93-120.
5. 加藤静夫・高野春広・岸本晴雄・西山恵美編著 『物語の楽しみ』ナカニシヤ出版, 2001年, 「はじめに」, pp. i-x, 「物語散策『鏡』——『ソフィーの世界』『白雪姫』『鏡像をなくした男』——」, pp. 242-265.

* なお、秋間実・芝田進午・島田豊監修『唯物論叢書』（汐文社）の第13巻で、岸本先生は「歴史論」を担当することになっていたが、この企画は2冊発行しただけで、実現されなかった。

【翻訳本】

6. アルフレート・クレラ 『疎外とヒューマニズム』藤野渉訳（部分訳）, 青木書店, 1971年.
7. G・シュティラー 『弁証法と実践——マルクス主義以前の哲学およびマルクス主義哲学における「活動的側面」にかんする研究』, 青木書店, 1972年.
8. K・フィッシャー 『ヘーゲルの論理学・自然哲学——ヘーゲルの生涯・著作と学説 3』（玉井茂氏との共訳）, 勁草書房, 1983年10月.
9. ピーター・B・ラービ 『哲学カウンセリング——理論と実践』（加藤恒男, 松田博幸, 水野

信義との共訳), 法政大学出版局, 2006 年.

【論文】

10. 卒業論文「フォイエルバッハに関する若干の考察」1960 年 1 月.
11. 修士論文「ヘーゲル著『フィヒテとシェリングの哲学体系の相違』について」1966 年 1 月.
12. 「ヘーゲルにおける現実と哲学——歴史哲学を中心にして」, 『日本福祉大学研究紀要』第 24 号, 1974 年 3 月, pp. 1-51.
13. 「実践における手段の問題」, 『唯物論』(『唯物論』編集委員会編; 汐文社) 第 4 号, 1975 年 5 月, pp. 80-99.
14. 「『弁証法とヒューマニズム』について」, 『唯物論』(『唯物論』編集委員会編) 第 10 号, 1978 年 11 月, pp. 214-225.
15. 「認識論の現代的課題」, 『哲学と現代』(名古屋哲学研究会機関誌) 第 4 号, 1979 年, pp. 21-34.
16. 「知的活動と人間をめぐる今日の問題——現代認識論のための一試論」, 季刊『科学と思想』(新日本出版社) 第 36 号, 1980 年 4 月, pp. 696-713.
17. 「認識論の日常的形態に関する一考察——『体験(談)』の問題をめぐる——」, 『哲学と現代』(名古屋哲学研究会機関誌) 第 6 号, 1982 年, pp. 19-36.
18. 「人間精神をめぐる今日の状況」, (シンポジウム「行為について」), 『中部哲学会年報』第 16 号, 1984 年, pp. 32-37.
19. 「思想としての『戦争体験』」, 季刊『科学と思想』(新日本出版社) 第 47 号, 1983 年 1 月, pp. 463-475.
20. 「フッサール『生活世界』概念の検討」, 『日本福祉大学社会科学研究所年報』第 3 号, 1988 年, pp. 95-119.
21. 「ヘーゲル『経験』概念の可能性と問題点」, 『日本福祉大学社会科学研究所年報』第 4 号, 1989 年, pp.65-82.
22. 「生活と生活の自覚化——生活への哲学的考察-1-」, 『日本福祉大学研究紀要』第 85 号(2), pp. 1-26, 1991 年 7 月.
23. 「今和次郎における生活把握」, 『哲学と現代』(名古屋哲学研究会機関誌) 第 12 号, 1991 年, pp. 1-14.
24. 「悲劇 的視座——介入への一つの手がかりとして」, 『哲学と現代』(名古屋哲学研究会機関誌) 第 13 号, 1993 年, pp. 73-84.
25. 「文化的ダイナミズムとしての生活過程」, 『生活問題研究』第 4 号, 1994 年 7 月, pp. 67-93.
26. 「遊びと人間 その人間学的検討にむけて——ホイジンガとカイヨワに立ち返って」, 『日本福祉大学研究紀要』, 第 100 号(2), 1999 年 3 月, pp. 81-126.
27. 「現代の人間の状況とシラーの 遊 と 美」, 『日本福祉大学研究紀要 現代と文化』(日

- 本福祉大学) 第 101 号, 1999 年 8 月, pp. 1-24.
28. 「精神の 辺境 へ —— シラーにおける 崇高 と 悲劇的なもの」, 『日本福祉大学研究紀要 現代と文化』(日本福祉大学) 第 102 号, 2000 年 3 月, pp. 143-176.
 29. 「最近の余暇状況と自由活動の可能性をめぐって」, 『日本福祉大学研究紀要 現代と文化』(日本福祉大学) 第 104 号, 2001 年 3 月, pp. 1-35.
 30. 「遊びと人間 —— 最近の余暇状況と自由活動の可能性をめぐって」, 『こころの健康』(日本精神衛生学会誌), 第 16 巻第 1 号, 2001 年 6 月, pp. 13-23.
 31. 「討論 現代における遊びと労働と」(岸本晴雄・渡辺直登・吉川武彦・鉅鹿健吉), 『こころの健康』(日本精神衛生学会誌), 第 16 巻第 1 号, 2001 年 6 月, pp. 27-32.
 32. 「(老人における) 生きがいとスポーツ・運動」, 『東海保健体育科学』, 第 25 巻第 2 号, 2003 年, pp. 29-33.
 33. 「『哲学カウンセリング』 —— ピーター・B・ラービの現状認識と四ステージモデル ——」, 『哲学と現代』(名古屋哲学研究会機関誌) 第 19 号, 2003 年 9 月, pp. 4-22.
 34. 「美と解放 —— シラーの『遊と美』, 『崇高と悲劇』を手がかりに ——」, 『哲学と現代』(名古屋哲学研究会機関誌) 第 20 号, 2004 年, pp. 35-53.
 35. 「障害をもって思うこと」, 『哲学と現代』(名古屋哲学研究会機関誌) 第 25 号, 2010 年 2 月, pp. 4-11. (これは, No. 46 と同じもの)

【その他】

36. 「日本における唯物論研究の動向」, 『唯物論』(『唯物論』編集委員会編) 第 5 号, 1975 年 11 月, pp. 237-242.
37. 「自由論と価値論をめぐって」(「日本における唯物論研究の動向」), 『唯物論』(『唯物論』編集委員会編) 第 6 号, 1976 年 5 月, pp. 262-271.
38. 「真下先生の思想方法」, 真下先生を偲ぶ会実行委員会 『俱會一處 真下先生を偲ぶ』1985 年 5 月, pp. 141-142.
39. 書評「TOMO カルチャーブックス」, 唯物論研究協会編 『唯物論研究』(白石書店) 第 10 号, 1984 年 4 月, pp. 123-126.
40. 「ドイツで感じたこと」, 『名古屋大学哲学会会報』第 5 号, 1987 年 12 月 1 日, pp. 2-8.
41. Sayers Sean 「分析哲学的マルクス主義と道徳」岸本晴雄訳, 『日本福祉大学研究紀要』第 81 号(2), 1990 年 4 月, pp. 127-157.
42. 書評「川田稔著『柳田国男 —— 「固有信仰」の世界』」, 『日本の科学者』Vol. 28, No. 5 (通巻 304 号), 1993 年 5 月, p. 52.
43. 「宮本先生の提起された問題」, 『哲学と現代』(名古屋哲学研究会機関誌) 第 21 号, 2005 年 10 月, pp. 96-100.
44. 書評「津田雅夫著『人為と自然』(2007 年・文理閣) について」, 『哲学と現代』(名古屋哲

学研究会機関誌) 第 23 号, 2007 年 12 月, pp. 134-147.

45. 「病気になるって感じる事 —— 脳卒中と私」, 『名古屋哲学セミナー通信』第 308 号, 2008 年 10 月 11 日.
46. 「障害を持って思うこと」, 「あいの会だより」(特定非営利活動法人あいの会 春日井まごころ) 秋号, 第 17 号, 2008 年 11 月 1 日.

【学会での発表・講演】

47. 「ヘーゲル著『フィヒテとシェリングの哲学体系の相違』について」, 1965 年 10 月 (中部哲学学会での発表と思われるが, 未詳).
48. 「ドイツで考えたこと」, 第 3 回名古屋大学哲学学会大会講演, 1987 年 4 月.
49. 「現象学と唯物論 —— 生活世界を中心に」, 唯物論研究協会第 11 回大会 (東京農工大学) 分科会発表, 1988 年 10 月.
50. 「生きがいとスポーツ・運動」, 東海体育学会「情報と身体 21 世紀の情報社会における身体性を考える」, 2002 年 3 月 16 日.

【学会および社会での活動】

名古屋大学哲学学会委員 (1990 ~ 2002 年度)

中部哲学学会会計監査 (1991 年 ~ 2001 年度)

名古屋哲学研究会事務局長 (1972 年 7 月 ~ 1979 年 7 月), 委員長 (1979 年 7 月 ~ 1996 年 7 月)

* 岸本先生の業績には, まだ漏れているものや埋もれているものが多々あるかと思えます. ご存知の方は, 池谷までご一報いただくと幸いです. ikeya@n-fukushi.ac.jp